

●図書紹介●

佐藤 真著
『総合的な学習』の
実践と新しい評価法

周知のとおり、このたびの教育課程の基準の改善の一つの目玉は、小・中・高等学校を通じて新たに設けられる「総合的な学習の時間」である。週当たり2～3単位時間とはいえ、これまでの教科・道徳・特別活動とは趣旨が異なるのであるから、新たな着想での取り組みが必要と思われる。

本書は、現に国立大学附属小学校の研究主任として「総合的な学習」を以前から推進してきた実績をもつ著者による著作であることが、重要な特色と思われる。具体的には、秋田大学教育文化学部附属小学校において、平成6年度から本格的に実施されている「フリー学習」と呼称されている「総合的な学習」の事例が、本書で適宜紹介されている。その点では、単なる実践事例を記述した著作と受け止められる可能性があるが、実は骨っばい理論的検討も相当力を入れてなされているのである。

本書の構成の主要部分を示しておこう。「第1部『総合的な学習』を实践するための理論と方法」は、6章で構成され、カリキュラム編成原理、学習環境づくり、教師の指導性、教材など、「総合的な学習」展開のための基本的な重要事項について考察されている。次の「第2部 効果的に実施するティーム・ティーチング」では、2章に分けて教員間の協力体制と保護者との連携による展開方法が検討されている。そして、「第3部 『総合的な学習』のための新しい評価方法」では、2章に分けて子ども自身の自己評価の意義と方法、さらに近年注目されている個々の子どもの作品やさまざまな学習過程上の言動・記録を素材とする質的評価法とも言える「ポートフォリオ評価法」の意義と方法が考察されている。

本書を通読して痛感したことは、著者の佐藤真氏

がもともとは実力派の小学校教諭ではあるが、教育方法・カリキュラム・教育評価に関しての学識も深く、視野が広いことである。ちなみに、各章末の注記に記載されている文献の量の多さや領域の広がりをみれば、そのことは明瞭である。さらに、著者が終始強調しておられるのは、子ども自身の学習に臨む自主性や探求力への信頼の重要性である。著者自身の表現に従えば、「児童一人ひとりの個性的な学び方を尊重しながら社会的に意味のある問題について身体性をもって解決的に学習する」(6～7頁)ことこそ、「総合的な学習」では肝要という考え方である。大いに賛意を表したい。

理論編と実践事例とのバランス、さらに理論的立場の一貫性などの点では、多少注文をつけたい点はある。しかし、著者の子どもの学びの真実に迫ろうとする純粹さと、広い視野に立つ「総合的な学習」へのアプローチが記された本書は、多くの教育関係者にも示唆的な貴重な書籍と思われる。

(上越教育大学 西 穰司)

●学事出版, A5判, 167頁, 1,800円(本体)